

諸分野にわたるウェルビーイング概念の体系化の試み

七沢 智樹 (Tomoki Nanasawa)

Technel 合同会社

- 1 本発表では、英語圏での「well-being」と、国内で使われる「well-being」やその訳語である「ウェルビーイング」の間の概念的整理を目的とした調査研究の結果を発表する。「well-being」は、WHOの健康の定義やSDGs目標の一部として採用されている言葉であり、心理学や社会学、医学等における研究対象であり、主に海外においては哲学的探求の対象でもあり一つの分野（幸福の哲学）を形成している。また、近年、政府文書などで頻繁にもちいられ、例えば、ムーンショットプロジェクトにおける政府文書（「ムーンショット型研究開発制度の概要及び目標について」）において「Moonshot for Human Well-being（人々の幸福に向けたムーンショット型研究開発）」という目標が掲げられている。しかし、こうした政府文書におけるウェルビーイング（well-being）のもちいられ方に問題があるように見受けられる。例えば、上記文書では、文書内でそれ以上のウェルビーイング（well-being）概念についての解説はなく概念的意味合いをあいまいにしたまま安易にもちいている印象を受ける。また、他の政府文書においては、文書内に異なるウェルビーイング概念が混在しているものが見受けられた。このように、社会的重要性の高い文書においても、概念的整理をあいまいにしたまま用いられている状況があると言える。こうしたことから、英語圏の「well-being」と国内におけるそれとの間の概念的乖離の整理を前提とした調査研究を行った。
- 2 具体的にはまず、学問領域で「well-being」がいかに論じられてきたかを確認した。次に、国内で「ウェルビーイング（well-being）」という用語がいつごろから、どのように使われてきたのかを論文や新聞記事のデータベースをもとに量的・質的調査を行い明らかにした。第三に、その調査結果と「well-being」の本来の概念的意味を比較検討した。
- 3 学問領域における扱われ方であるが、まず、哲学領域では幸福の哲学（Philosophy of Well-being）において、well-beingの概念的探求がとくに1980年代以降に盛んにおこなわれてきた。well-beingの概念的意味の解釈には諸説あるが、（Parfitの分類をもとにした）快樂説、欲求充足説、客観リスト説の有力な三説による「三つ巴」の状況であるとされている。一方で、20世紀後半からwell-beingを計測対象としようとする流れが生まれ、主にアメリカの心理学・社会学研究において、主観的幸福（subjective well-being）度を計測する尺度が開発され広く用いられてきた。そして、医学領域においてはこうした計測尺度が開発されて以後、それらをもちいたwell-beingに関する研究が多く行われるようになった。well-beingについて、哲学・倫理領域では、主観的、客観的幸福についての概念的研究、それ以外の領域では主に主観的幸福（幸福感）に関する調査研究が行われてきたと言えるだろう。こうした多様な領域における研究を背景としてwell-beingの概念は

形成されているといえる。

- 4 次に、簡易調査として国内における「ウェルビーイング」という単語がもちいられた論文数と新聞記事数を調査した。この調査によって、日本でこの単語がもちいられるようになってきた年代および状況を明らかにすることができる。その結果、2020年以降の新聞記事数が飛躍的に増えていた（日本経済新聞のデータベース検索において、2010年以降の“ウェルビーイング”の検索結果が57件、そのうち47件が2020年以降掲載分）。一方で、Google Scholarにおいて国内論文の掲載数は増加しているものの新聞掲載数に比べると緩やかであった（2011年-2015年：620件、2016年-2020年：1280件）。こうしたことから、「ウェルビーイング」は、国内において学術用語として一部使われていたものの一般には普及していない状況であったが、2020年より「ウェルビーイング」として一つの「はやり言葉」として急激に広がりつつある状況が見て取れる。
- 5 そして、国内において「ウェルビーイング」はどのような意味で使われているのだろうか。日本経済新聞における上記の57件の記事において、ウェルビーイングの意味は「主観的幸福」「心身の満足感」「心的、身体的、社会的に良好な状態」「実感としての豊かさ」「幸せ」「幸福」「よりよく生きる」などと解説されている。その他にグーグル検索エンジンを使って検索上位の「ウェルビーイング」についての説明内容を確認したが、おおむね同じような意味として説明されていた。これらの説明は、心理学またはWHOの定義、およびそれらを混ぜ合わせたうえで簡単にしたものや解釈することができ、そうしたwell-being概念を出発点としながらも「はやり言葉」として意味を簡素化した「ウェルビーイング」が一般に流布していると考えられる。一方で、少なくとも上記の日本経済新聞においては、「幸福の哲学」における三説を踏まえたウェルビーイングの解説は皆無であった（論文においても限定的であった）。そのため、海外におけるwell-beingの概念的意味合いと国内で流布するウェルビーイングという言葉の意味合いに乖離があることが確認された。発表においては、さらなる調査と考察を踏まえ報告する。
- 6 一方で、幸福概念自体は、国や文化、民族、集団、そして個人によって異なるものであり、それらの幸福概念を、西洋から輸入されたウェルビーイングの概念をもとに統一的に概念化することには望ましくない。また、西洋的な自己観を前提とした幸福の哲学における幸福が、日本人にとっての幸福感に合致するとは思えない。したがって、日本文化に適した、日本人にとってのウェルビーイングも希求すべきであり、こうした視点を欠いてはならない。

参考文献

- Fletcher, G. ed., 2017, *The Routledge Handbook of Philosophy of Well-Being*, New York: Routledge.
- 森村進, 2018, 『幸福とは何か——思考実験で学ぶ倫理学入門』, 筑摩書房.
- 渡邊淳司／ドミニク・チェン, 2020, 『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために——その思想、実践、技術』, ビー・エヌ・エヌ新社.